

Gröbner basis による分割表の数え上げ

倉敷芸術科学大学 中川 重和(Sigekazu Nakagawa) *

1 はじめに

行和 $\mathbf{r} = (r_1, r_2, \dots, r_I)$ と列和 $\mathbf{c} = (c_1, c_2, \dots, c_J)$ が与えられた $I \times J$ 分割表全体の集合を $\Omega(\mathbf{r}, \mathbf{c})$ とする ($N = \sum_{i=1}^I r_i = \sum_{j=1}^J c_j$). つまり, $\mathbf{u} = (u_{ij}) \in \Omega(\mathbf{r}, \mathbf{c})$ は $u_{ij} \in \mathbf{N} = \{0, 1, 2, \dots\}$, $\sum_{j=1}^J u_{ij} = r_i$, $\sum_{i=1}^I u_{ij} = c_j$ を満足する. 分割表の数え上げとは, すべての $\mathbf{u} = (u_{ij}) \in \Omega(\mathbf{r}, \mathbf{c})$ を列挙することで, (統計学における) Fisher の正確確率法による p 値計算において必要である.

分割表の数え上げ問題は, 古くから知られた基本的な問題であり, Fisher の正確確率法以来, 考えられている. 計算機を意識した算法として, 行の置換によるクラス分けに基づく Fortran プログラム [13] やネットワークアルゴリズム [10] [11] などが 1980 年代に研究されている.

1990 年代に入って, Markov Chain Monte Carlo(MCMC) 法が統計学の有効な手法として大きな話題を呼び, この流れは分割表解析にも及んだ. 統計学の標準的な教科書では, 分割表の独立性の検定において, (経験則として) すべてのセルの度数 (u_{ij}) が 5 以上のとき, 検定統計量が χ^2 分布に漸近的に従うとして検定せよ, またそうでないときは, Fisher の正確確率法により p 値計算をせよ, とある. しかし, いずれにも当てはまらない例がある. 例えば, [7], pp.364, Table 1. この例では, いくつかのセルの度数が 5 以下 (χ^2 分布に漸近的に従わない) であるにもかかわらず, $\#\Omega(\mathbf{r}, \mathbf{c})$ が多き過ぎて, 事実上すべての分割表を列挙できない.

このような問題にも頑健な手法として, 分割表解析における MCMC 法の研究が進んでいる. 中でも, Markov 連鎖の推移パターン (Markov basis という) の構成に Gröbner basis を用いたアルゴリズムを提案した [7] の貢献は大きい.

MCMC 法を分割表解析に適用する際, 問題となるのが収束性の問題と精度の問題である. 本稿では精度の問題に注目するが, その場合 (計算できる) exact な値との比較が不可欠となる. [14] に基づき, Gröbner basis と有向グラフの backward search による数え上

*nakagawa@soft.kusa.ac.jp

げを実現し, exact p 値を計算する. そして, 既存の MCMC での結果 ([1]) との数値比較を行う.

2 節では, 記号の定義とおさらいの意味を込めて, Gröbner basis と分割表の関連について述べる. 3 節では, Backward search とその実装について述べる. 3.1 節では, $I \times J$ 分割表において, Gröbner basis と有向グラフの backward search による方法で, どの程度の問題までが計算できるかを示す. 3.2 節では, 本稿での方法が多元分割表にも適用可能であることを示す.

なお, 本報告に関連する話題として分割表の総数数え上げがある. 総数の近似として, 正規分布による近似 [8] がある. また対称式の内積計算 [6], 分割統治法 [12], などが総数の完全な数え上げとして研究されている.

2 分割表の数え上げと Gröbner basis

定義 1 Z^I, Z^J の標準基底をそれぞれ $\{e_i\}, \{e'_j\}$ として, 線形写像

$$\begin{aligned} \pi: N^{IJ} &\rightarrow Z^I \oplus Z^J \\ u_{ij} &\mapsto \sum_{i,j} u_{ij} e_i \oplus e'_j \end{aligned} \quad (1)$$

を定めるとき, $\Omega(r, c) = \{u \in N^{IJ} \mid \pi(u) = [r \ c]'\}$ である. π の定義域を Z^{IJ} に拡張して $\ker(\pi) \subset Z^{IJ}$ を考えるとき (今後, $\ker(\pi) \subset Z^{IJ}$ とする), $\ker(\pi)$ の任意の元は周辺和を不変にする. したがって, $\ker(\pi)$ の基底が $\Omega(r, c)$ 上のひとつの Markov basis を与える. ここで, $\{m_1, \dots, m_L\} \subset \ker(\pi)$ が Markov basis であるとは, すべての $u, u' \in \Omega(r, c)$ に対して, $(\epsilon_1, m_{i_1}), \dots, (\epsilon_A, m_{i_A})$ が存在して (ただし, $\epsilon_i = \pm 1$),

- $u' = u + \sum_{j=1}^A \epsilon_j m_{i_j}$ および
- $u + \sum_{j=1}^a \epsilon_j m_{i_j} \geq 0$ ($1 \leq a \leq A$)

をみたすことである.

我々の問題へ Gröbner basis の理論を持ち込むために, (1) で与えた線形写像を多項式写像へと持ち上げる:

$$\begin{aligned} \hat{\pi}: k[\mathbf{x}] &\rightarrow k[\mathbf{t}] \\ x_{ij} &\mapsto t^{e_i \oplus e'_j}. \end{aligned} \quad (2)$$

ただし, $\mathbf{x} = (x_{11}, x_{12}, \dots, x_{IJ})$ であり, $\mathbf{t} = (t_1, t_2, \dots, t_{I+J})$ である. このとき,

$$\langle x_{ij} - t^{e_i \oplus e'_j} \rangle \quad (3)$$

は $IJ + I + J$ 個の変数 \mathbf{x}, \mathbf{t} からなる多項式環 $k[\mathbf{x}, \mathbf{t}]$ のイデアルであり, $I := \ker(\hat{\pi})$ は $k[\mathbf{x}]$ のイデアルである. I と Markov basis の関係は次の命題で与えられる:

命題 2 ([7]) N^{IJ} 上の任意の *term order* \succ に対し, 有限集合 $M \subset \ker(\pi)$ で

$$\{x^{m^+} - x^{m^-} \mid m \in M\}$$

が I の *Gröbner basis* となる M が存在する. そしてこの M が $\Omega(\mathbf{r}, \mathbf{c})$ 上の *Markov basis* を与える.

命題 2 から, *Markov basis* を求めることは (2) で定まる多項式写像の核 $\ker(\hat{\pi})$ の生成元を求める問題に帰着される. この問題の解法は *Gröbner basis* 理論では既知の事実 ([5]) であり, 以下のように *Markov basis* を求めるアルゴリズムが構成できる. ただし, 3.2 節にある多元分割表の場合には少々の工夫が必要である ([9], [2]).

Markov basis を求めるアルゴリズム ([5])

- $\langle x_{ij} - t^{e_i \oplus e_j} \rangle (\subset k[\mathbf{x}, t])$ の reduced *Gröbner basis* (with elimination order $t \succ \mathbf{x}$) G を求めよ.
- $G' := G \cap k[\mathbf{x}]$ が I の ($k[\mathbf{x}]$ における) *Gröbner basis* i.e. $I = \langle G' \rangle$. G' が求める *Markov basis* である.

$\ker(\hat{\pi})$ の reduced *Gröbner basis* (drl with $x_{11} \prec x_{12} \prec \cdots \prec x_{IJ}$) は,

$$\{x_{i\ell}x_{kj} - x_{ij}x_{k\ell} \mid 1 \leq i < k \leq I, 1 \leq j < \ell \leq J\}$$

であり, 対応する $\mathbf{m} = (m_{ab}) \in M$ は

$$m_{ab} = \begin{cases} -1 & (a = i, b = j) \\ 1 & (a = i, b = \ell) \\ 1 & (a = k, b = j) \\ -1 & (a = k, b = \ell) \\ 0 & (\text{その他}) \end{cases} \quad (4)$$

である.

定義 3 $M \subset \ker(\pi)$ に対し, $\Omega(\mathbf{r}, \mathbf{c})$ に付随する無向グラフ \mathcal{G}_M を以下のように定義する. $\Omega(\mathbf{r}, \mathbf{c})$ を \mathcal{G}_M の頂点集合とする. \mathbf{u}, \mathbf{u}' が辺で結ばれるのは, ある $\mathbf{m} \in M$ によって, $\mathbf{u} = \mathbf{u}' + \epsilon \cdot \mathbf{m}$ ($\epsilon = \pm 1$) のときである.

このとき, 命題は次のように読み換えることができる.

命題 4 ([5]) \mathcal{G}_M が連結グラフである $\iff \{x^{m^+} - x^{m^-} \mid \mathbf{m} \in M\}$ がイデアル I を生成する.

定義 5 N^{IJ} 上の任意の *term order* に対し, $\Omega(\mathbf{r}, \mathbf{c})$ に付随する有向グラフ $\mathcal{G}_{M, \succ}$ を以下のように定義する. 無向グラフ \mathcal{G}_M において, \mathbf{u} から \mathbf{u}' への有向辺を $\mathbf{u}' \prec \mathbf{u}$ のときに定義する.

このとき, 以下が成立する:

命題 6 ([5]) $\mathcal{G}_{M, \succ}$ が *unique sink* をもつ $\iff \{x^{m^+} - x^{m^-} \mid m \in M\}$ が I の \succ に関する *Gröbner basis* である.

3 Backward search

前節の議論より, 分割表の数え上げは有向グラフの backward search により, 実行できる ([14]).

Input: 周辺和 \mathbf{r}, \mathbf{c}

Output: $\Omega(\mathbf{r}, \mathbf{c})$ のすべての点の列挙

1. $M : \ker(\hat{\pi})$ の Gröbner basis G の計算
2. $\mathbf{u}' \in \Omega(\mathbf{r}, \mathbf{c})$ を一つ見つけよ (観測データ)
3. $x^{\mathbf{u}'} \xrightarrow{G}_+ x^{\mathbf{u}''}$ の計算: \mathbf{u}'' は $\Omega(\mathbf{r}, \mathbf{c})$ に付随する有向グラフの unique sink
4. 初期化; $\text{Active} := \{\mathbf{u}''\}$, $\text{Passive} := \emptyset$;
5. **while** ($\text{Active} \neq \emptyset$) **do**

Choose $\mathbf{u} \in \text{Active}$

forall $m = m^+ - m^- \in M (m^+ \succ m^-)$ **do**

if $(\mathbf{u} - m^- \geq 0)$ **and** $(\mathbf{u} + m \notin \text{Passive})$ **then** $\text{Active} := \text{Active} \cup \{\mathbf{u} + m\}$;

$\text{Active} := \text{Active} \setminus \{\mathbf{u}\}$;

$\text{Passive} := \text{Passive} \cup \{\mathbf{u}\}$;

ステップ 1 から 3 は数式処理システム Asir [3] で実装している. ステップ 4, 5 を C 言語で実装している. 変数 Active と Passive は探索が頻繁に起こるためデータ構造として 2 分木を採用している.

3.1 $I \times J$ 分割表の数え上げ

表 11 は [4] から抜粋したふさぎ込み症候群のデータである。米国の 4 つの病院において、十二指腸潰瘍の摘出度合により、無気力、ふさぎ込みなどになる患者の頻度をまとめたものである。なお、手術法は

- A 十二指腸 0% 摘出 B 十二指腸 25% 摘出
C 十二指腸 50% 摘出 D 十二指腸 75% 摘出

に層別している。

表 12 は 分割表それぞれの unique sink である。各病院毎の 4 つの 4×3 分割表に対し、backward search を実行した結果が表 13 である。左からふさぎ込み症候群データの総数、exact p 値 (DEC Alpha station 400MHz, 256MB での CPU Time(sec)) および MCMC(10^6 回) による p 値である。 p 値とは

$$p = \sum_{v \in \mathcal{T}} \Pr(v)$$

であり、 $\mathcal{T} = \{v \in \Omega(r, c) \mid \Pr(v) \leq \Pr(u)\}$ としている。なお、病院 4 については、この実装では計算できなかった¹⁾。

表 11: ふさぎ込み症候群データ

病院	手術法	ふさぎ込み症候群			計	病院	手術法	ふさぎ込み症候群			計
		無	軽	重				無	軽	重	
1	A	18	6	1	25	3	A	12	9	1	22
	B	18	6	2	26		B	15	3	2	20
	C	13	13	2	28		C	14	8	3	25
	D	9	15	2	26		D	13	6	4	23
		58	40	7	105			54	26	10	90
2	A	8	6	3	17	4	A	23	7	2	32
	B	12	4	4	20		B	23	10	5	38
	C	11	6	2	19		C	20	13	5	38
	D	7	7	4	18		D	24	10	6	40
		38	23	13	74			90	40	18	148

¹⁾[11] を用いて計算すると、総数は 15,272,124 であり、exact p 値は 0.7677 となる

表 12: unique sink

1				2					
	25	0	0	25		17	0	0	17
	26	0	0	26		20	0	0	20
	7	21	0	28		1	18	0	19
	0	19	7	26		0	5	13	18
	58	40	7	105		38	23	13	74

3				4					
	22	0	0	22		32	0	0	32
	20	0	0	20		38	0	0	38
	12	13	0	25		20	18	0	38
	0	13	10	23		0	22	18	40
	54	26	10	90		90	40	18	148

表 13: ふさぎ込み症候群データの総数, p 値と MCMC

	$\#\Omega(r, c)$	exact p 値 (CPU Time, sec)	MCMC による p 値
1	1,106,454	0.0610 (34,635)	0.0633
2	1,107,960	0.7849 (35,279)	0.7856
3	944,944	0.5280 (24,574)	0.5340
4	—	—	0.7698

3.2 $3 \times 3 \times 3$ 分割表の数え上げ

Backward search による数え上げの利点は, [10], [11], [13] などに対し, 多元分割表にも適用可能なことである. ここでは, $3 \times 3 \times 3$ 分割表の数え上げを実行する. $3 \times 3 \times 3$

分割表の数え上げとは、以下の 27 個の line sums

$$u_{.jk} := \sum_{i=1}^3 u_{ijk}, u_{i.k} := \sum_{j=1}^3 u_{ijk}, u_{ij.} := \sum_{k=1}^3 u_{ijk}$$

が与えられたもとで、これを満足するようなすべての (u_{ijk}) を列挙することである。 $u_{.jk} = u_{i.k} = u_{ij.} = s$ について実行した結果が表 14 である (DEC Alpha station 400MHz, 256MB). 表 15 は $3 \times 3 \times 3$ 分割表の Markov basis である ([2]).

表 14: $u_{.jk} = u_{i.k} = u_{ij.} = s$

s	総数	CPU Time
1	847	0.3
2	43,687	307
3	619,219	47,699

表 15: $3 \times 3 \times 3$ 分割表の Markov basis

-	+	0	+	-	0	0	0	0	27 個	4 次
+	-	0	-	+	0	0	0	0		
0	0	0	0	0	0	0	0	0		
+	-	0	-	+	0	0	0	0	18 個	6 次
-	0	+	+	0	-	0	0	0		
0	+	-	0	-	+	0	0	0		
+	-	0	-	0	+	0	+	-	36 個	6 次
-	+	0	+	0	-	0	-	+		
0	0	0	0	0	0	0	0	0		
-	+	0	+	0	-	0	-	+	28 個	7 次
+	0	-	-	0	+	0	0	0		
0	-	+	0	0	0	0	+	-		

$$\begin{array}{cccccccc}
 + & - & 0 & - & 0 & + & 0 & + & - \\
 - & 0 & + & 0 & 0 & 0 & + & 0 & - \\
 0 & + & - & + & 0 & - & - & - & +2 \\
 & & & & 1 \text{個} & & & & 9 \text{次}
 \end{array}$$

参 考 文 献

- [1] 中川重和 (1999a). 分割表上の Markov basis と Gröbner basis. 日本計算機統計学会第 13 回大会論文集, 54-57.
- [2] 中川重和 (1999b). 3 次元分割表上の Markov chain の Gröbner 基底による構成. 第 67 回日本統計学会講演報告集, 57-58.
- [3] 野呂正行, 下山武司 (1995). *Asir User's Manual*. <ftp://endeavor.fujitsu.co.jp>.
- [4] 柳川堯 (1986). 離散多変量データの解析, 共立出版.
- [5] Adams, W.W. and Loustaunau, P.(1994). *An Introduction to Gröbner bases*. AMS.
- [6] Diaconis, P. and Gangolli, A(1995). Rectangular arrays with fixed margins. In *Discrete Probability and Algorithms*, Springer, New York, 15-41.
- [7] Diaconis, P. and Strumfels, B.(1998). Algebraic algorithms for sampling from conditional distributions. *Ann. Statist.*, **26**, 363-397.
- [8] Gail, M. and Mantel, N.(1977). Counting the Number of $r \times c$ Contingency Tables with Fixed Margins. *J. of the American Statistical Association*, **72**, No. 360, 859-862.
- [9] Hosten, S. and Strumfels, B.(1995). GRIN: An Implementation of Gröbner Bases for Integer Programming. Springer LNCS, **920**, 267-276.
- [10] Metha, C. R. and Patel, N. R.(1983). A Network Algorithm for Performing Fisher's Exact Test in $r \times c$ Contingency Tables. *J. of the American Statistical Association*, **78**, No. 382, 427-434.
- [11] Metha, C. R.(1986). ALGORITHM 643: FEXACT: A FORTRAN Subroutine for Fisher's Exact Test on Unordered $r \times c$ Contingency Tables. *ACM Transactions on Mathematical Software*, **12**, No. 2, 154-161.
- [12] Mount, J.(1995). Application of Convex Sampling to Optimization and Contingency Table Generation/Counting, Ph.D. Dissertation, Department of Computer Science, Carnegie Mellon University.
- [13] Saunders, I. W.(1984). AS 205: Enumeration of $R \times C$ Tables with Related Row Totals. *J. Royal Statistical Society*, 340-352.
- [14] Strumfels, B.(1996). *Gröbner bases and convex polytopes*. AMS.